

フレーミングと「自己表出」： 吉本隆明「言語にとって美とは何か」の論理構造の 再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学文学部日本文学研究所 公開日: 2025-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 疋田, 雅昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000669

フレーミングと「自己表出」

——吉本隆明「言語にとって美とは何か」の論理構造の再検討——

疋田 雅昭

吉本隆明の『言語にとって美とはなにか』（以下、『言語美』と称す）は、一九六五（昭和四〇）年に刊行された。詩壇では、後に六〇年代詩人と呼ばれる若者達が台頭し、日氏賞事件によって戦後詩壇を牽引していた五〇年代の詩人たちが相対化されつつある時期ではあったが、一方で六〇年安保闘争の政治的ムードも反省的なそれも、ともに沈静化し、いわゆる停滞的ムードが漂っていた時期でもあった。

吉本の意欲的な試みに対する反応は、吉本の立ち位置や論におけるマルクス経済学的な語彙の使用もあって、どうしても「価値」をめぐる論争に陥りがちであり、かつ、優れた論考であっても「自己表出」「指示表出」をマルクス理論で考えることによる、他論への「誤読」の指摘に終始している。だが、やはり『言語美』は、詩論であり文学分析の書である。その理論の「価値」は、あくまでも「文学」の領域で考えられるべきである。

本書の同時代の受容の内実を検討することは、もちろん必要なわけだがそれは別稿に譲り、本論では、こうした「誤読」の

議論を呼び起こしてしまう論を、一度同時代の文脈からは可能な限り切り離れた上で、論の構造について論じてみたい。周知の通り、『言語美』は、七章構成になっているが、全体としては一から三章の理論篇と、四章～七章の応用編に分かれている。後者は、さらに文学史を中心として、歴史的な発展を述べる前半（四章～五章）と、もう少し芸術全般から巨視的にみた後半（六～七章）に分けることが可能だ。

これまた周知のことながら、『言語美』には多くの独想的な図と何を指示しているか不明瞭な例が提示されているが、後にゆけばゆくほど、例示や図の割合は増えてゆき、その例や図の検討が十分になされないまま、後半部分の実践に至ってしまった。本論では、まず理論篇に相当する三章までを、図と事例を中心に確認してみたいと思う。

その過程において、最も重要になってくるのは、「韻律」や「リズム」が外的な枠組に見えながら、これが「自己表出」に関わってくる点である。なぜならば、それが四章以降の具体的な実践にかかわってくるからだ。そして、その理論と実践の間にある

「ねじれ」の構造こそが、論の「価値」論争にの背景にあると考
えられる。まずは、理論篇にあたる部分を愚直に読んでゆこう。

一

言語の発生過程を問うことと、発生の根元を問うことは異なる。吉本の手付きは現象学のそれと近いところがあるので、読み進めてゆけば吉本が前者に拘っていることは理解出来るが、それであっても、吉本はまず言語の発生を問う。それも何故か吉本は、言語学者たちの言説よりも先に、フロイトの心理学の検討から始めている。

言語の最初の音声は伝達の用をなし、性欲の相手と呼び寄せた。原始語は原始人の労働作業に伴って発達した。これらの労働は共同のそれであって、言葉をリズムカルに発しながらおこなわれた。その際、性的関心は場違いである労働の上におかれた。原始人は労働を性的活動と等価値のものでそれを代理するものとしてとり扱い、以て労働を謂わば快適ならしめた。

引用部は、フロイトが『精神分析入門』で引用している、言語学者・スベルベルの説である。フロイトは、ここから男／女の比喩を、武器Ⅱ道具／原料Ⅱ加工物に当てはめ、言語に根源的に内在する「対立」を明らかにする。

これを受けた吉本の解釈は、言語を根源的に問うことの難しさだ。以後、言語発生過程についての二つの説、自己の何らかの表出という非実用的側面と、「社会的交通」という実用的な面の検討に移る。前者には、S・K・ランガールの『シンボルの哲学』を、後者にはマルクスの『ドイツ・イデオロギー』を組上げて検討する。

ここまで読み進めてみても、何故吉本は最初にフロイトの検討から始めたのか、謎は深まる一方だ。ただ、この問題を考える際に、前者の非実用的側面に対する考察にも紙幅を割いていないことを考えるべきだろう。後者の言語交通説をしたマルクスそのものよりも、そこから我田引水的な理論構築をしたスターリンやブイコフスキーから批判した後、吉本はエンゲルスが「言語の起源についてのべたいちばんまとまった箇処」として、「猿の人類化への労働の関与」を引用している。

手の発達、労働とともに開始された自然の支配は、新しい進歩がなされるたびに、人類の視野を拡めた。(中略) 換言すれば、成立しつづつあった人類は、相互に何事かを言はなくてはならぬまどになった。かかる欲望はそのため
の機関をつくった。

吉本は、この引用の一部に傍点を振り、この箇所をマルクスの「ドイツ・イデオロギー」の「他人にとつても私自身にとつても存在するところの実践的な現実的な意識」と対応するもの

だとして、以下の様に述べている。

この人間が何ごとかをいわねばならないまでになった現実の条件と、その条件にうながされて自発的に言語を表出することのあいだにある千里の距たりを、言語の自己表出 (Selbstausdrückung) として想定できる。自己表出は現実的な条件にうながされた現実的な意識の体験が積み重なって、意識のうちには幻想の可能性としてかんがえられるようになったもので、これが人間の言語が現実を離脱してゆく水準を決めている。それとともに、ある時代の言語の水準をしめす尺度になっている。

この引用に関しては幾つかの指摘をしておく必要がある。まず、言うまでもなくそのドイツ語の使用からは、吉本の論理構築も、マルクス主義批評の——それも吉本がよく言う「俗流マルクス主義批評」ではなく——「正統」な延長上にあるということ。動物の言語から人間の言語への「進化」には、「現実の離脱」が必要であるということ。そして、交通説を言語の起源としてしまうことの無意味さについてである。

最後の無意味さについては、もう少し言葉を補う必要があるだろう。我々は今、人間の言語の起源(過程)を問うているわけであり、人間を含めた言語一般のそれを問うているわけではない。吉本がわざわざ、人間の言語を動物のそれと分けて考えているのも、そこに理由がある。

それなのに、言語の発生について二つに大別され、またいずれかを混同している見解群は、言語の本質からその実用性と自発的な表出のいずれかを切りとり、その断面をひろげて、ついに対照的な彼岸にまで達してしまった。

「自己表出」と対になる語をのちに「指示表出」と呼ぶようになるが、この時点ではまだ、両者の説明はない。しかし、何かしらの根源的一元性を述べている訳でもない。吉本は、こうした「自己表出」以前の「動物的な段階」の状態を、「反射」と呼ぶ。つまり、現実的反射の段階では、自己に対する(あるいは他者に対する)「意識」は、生じてはいないのだ。「意識」を伴わない言語を人間のそれと呼べないのであれば、それ以前の言語を「根元」であると考える必要がそもそもないのである。

ただ、確かに、人間が人間以外の他者たちのコミュニケーションを想定したとき、「意識」発生以前から考えようとする説明は理解しやすい。だが、それでは交通手段のための言語が根源的な言語に見えてしまい、そこから「自己表出」が生じて来たように見えてしまう。そこで、吉本は執拗なまでに、「人間／動物」の二項対立を強調しながらも、「自己表出(非実用)／交通手段(実用)」という対立的思考を批判してゆくのである。

たとえば狩猟人が、ある日はじめて海岸に迷いでて、ひろびろと青い海をみたとする。人間の意識が現実的反射の

段階にあったとしたら、海が視覚に反射したときある叫びを（う）なら（う）と発するはずだ。また、さわりの段階にあるとすれば、海が視覚に映ったとき意識はあるさわりをおぼえ（う）なら（う）という有節音を発するだろう。このとき（う）という有節音は海を器官が視覚的に反映したことにたいする反映的な指示音声だがこの指示音声のなかに意識のさわりがこめられることになる。また狩猟人が自己表出できる意識を獲取しているとすれば（海（う））という有節音は自己表出として発せられて、眼前の海を直接的にはなく象徴的（記号的）に指示することになる。このとき、（海（う））という有節音は言語としての条件を完全にそなえることになる。

「言語美」における最も有名な比喩であるので、そのまま引用してみた。ここでは「意識」を「獲取」している条件を「象徴的（記号的）」という言葉で表している。前段の比喩を敷衍すれば、「象徴的（記号的）」な（海（う））の条件は、眼前に（う）と発せさせた「現実」がないことだ。反射的な世界とは、現実の眼前あるいは現実の裡に生じる。しかし、その現実を離れたとき、はじめて言語は非現実な何かと結び結ぶことになる。非現実な何かと結びついた言語は、自己と客観のあわいに存在し、それを「意識」している「自己」を発見させる。それを吉本は「意識のさわり」と呼んでいるのだ。だが、この（う）はあくまでも反射であり、それは「交通の手段」ではない。

にもかかわらず、これで吉本の当初の目的は達成されたのである。吉本の最終的な目的は「言語」にとって「美」とは何かであるが、そこで必要とされるのは、現実（対象）と言語と人間（主体）の中にある「経路」である。これを吉本は「現実の文学にわたる経路」と呼び、「ほんとうにむつかしい」のは、この「経路」の探究であることを述べている。

ここまで考えれば、暫定的ではあるが、当初の疑問にもいくつかの答が見つかる。心理学は、現実と言語の関係性の「根元」に「無意識」（フロイトに言わせれば「性」）を指定する。別の言い方をすれば、言語も現実も結局は「性」に規定されてしまう。精神分析とは言語以前の世界に対する「本質主義」的思考である。しかし、もちろんこれは精神分析の欠点ではなく、むしろ特質である。精神分析とは、この「性」の一元論によって病を治癒しようとするための理論体系であるからだ。だが、言語にとっての「美」を考えるためには、そこに作家の「意識」的な所産を見出し、それ以後の過程（文学が人々に美として見出される過程）を追究せざるを得ない。

二

指示機能（交通手段）としての言語観が多かった当時の言語学、哲学の状況下において吉本は、「自己表出」という言葉によって、それらとは正反対（に見えるよう）な言語起源を措定した。しかし、それらは「自己表出」性への一元的な還元を意図した

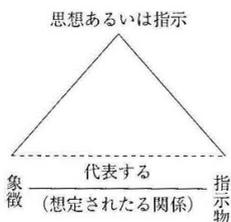
ものではなかった。

カッシーラの言語進化論は、擬態的、類推的、象徴的と変化してゆくものだが、この発達段階をオグデン＝リチャーズがマリノウスキーから借用した言語三角形（指示＝思想、象徴、指示物）を参照項として、左記のように図式化してゆく。

これらの把握から吉本が学んだことは「反射」の状態からいかに言語が成立するかを、三角形の頂点の高さという比喻で示すことだった。その過程において、マリノウスキー＝リチャーズの理論の最大の欠陥を、隆起する三角形の頂点（思想）が、最初から「儀式的＝物語」的「行動的」という二つの面に分け、それらを「対自であること」によって対他」「対他であること」によって対自」という風に考えることだと指摘する。当時のサルトルの現象学的思考、「対自」「対他」を取り入れた考え方であるが、これだと「自己表出」性はアプリアリなものになってしまい、その「自己表出」性に二つの起源が見出されるという循環的な結論を導いてしまう。

そこで、吉本が提示する進化説は以下（第1図～3図）の通りである。

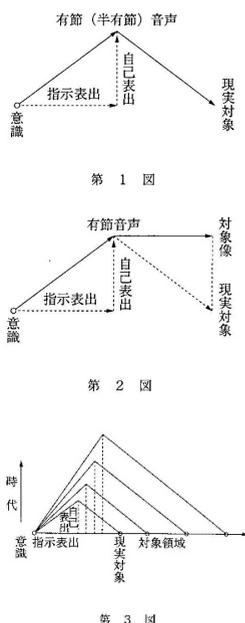
吉本の説には二つの特徴があることを指摘しておく必要があるだろう。一つは、「現実対象」が「事物」であるか「儀式」であるかということは無意味な根元論にすぎず、問題（その過



程）は「自己表出」の高さによるという点。もう一つは、「指示表出」は「自己表出」によって「言語」化するということがある。図の点線の矢印に注目してみるといい。指示表出が自己表出によって隆起されることによってなされた音声は、既に「現実対象」ではなく「対象」の「像」を指し示している。ここに、前章で指摘した「言語」には目の前に「現実」がないことが、その成立条件にあったことを想起してもらってもよい。

この考え方の特徴は、「指示表出」が「自己表出」によって隆起されなければ、「言語」は「像」に結びつかないことである。逆に言えば、現実と「指示表出」で結びつけられている状態は、ただの「反射」であり「言語」ではないということだ。

続けて吉本は、S・I・ハヤカワの『思考と行動における言語』の議論とゴーズイブスキの議論を検討する。これらは、固有名詞（に近い概念）が、以下に抽象概念化してゆくかという発達段階に関するものであることが共通している。だが、ここでの吉本の目的は、「発達段階の実証的な研究」



ではない。それは「しいてちいる必要もない」と考える吉本は、「にもかかわらず、なぜ人間は実在の牡牛を（牡牛）」という言葉（名称）でよぶようになったか？ という問い」に拘ることは重要であると考ええる。

人間が、じぶんを（人間）として意識の対象にできるようになったことと、人間が実在の牡牛を、（牡牛）という名称でよべるようになったことは、別のこととはおもえない。

例えば「目」で考えて見る。「目」の仕組みは生物毎に異なるわけだから、「目」を通して得られる情報は「自然」そのものではない。さらに「目」という「知覚」で得られた情報が「言語」によって意識された瞬間それは「像」になるわけだから、「像」は「知覚」そのものでもない。

ここから吉本は、「言語の水準」という概念をもちだす。

この関係から、ある時代または社会には、言語の自己表示と指示表示とがあるひとつの水準を、おびのようにひらげているさまが想定される。

このあたりから、「指示表示」という語を多用してゆくのだが、この語を明確に定義したり太字で強調したりすることない。だが、「自己表示」にも「指示表示」にも、それぞれ同時代的な

影響と歴史的な積み重ねがあり、この点は、言語主体の能力とは関係なく存在するものであり、「言語」にはこの両側面が含まれている。

フロイトにも同様の指摘が可能なかもしれないが、吉本は自己の理論を構築する際に、実は同時代の先鋭的な思想家と相同的なものを有していることに無自覚なところがある。この場合の「歴史」性や「社会」性の問題は、ソシユールのいう通時的／共時的という区別と非常に近い。しかし、後に「現代思想」と呼ばれることになる記号論や構造的把握の源泉のベースとなるソシユールに、現象学的な位置から考える吉本はやや距離を置いているように見える。

吉本自身はこの点について言及していない。だが、「自己表示」の強度は、通時的／共時的の両側面から考えるしかないわけで、事実、「言語美」の後半は、「自己表示」から見た「文学史」になっており、その美的基準は常に通時性（歴史性）と、共時性（同時代性あるいは現代性）からみた「自己表示」性の強度である。

三

吉本は、カッシラの言う、三段階論の内実は検証出来ないこととしながらも、特定の音の組み合わせが特定の対象と結びつき、象徴なるという過程そのものは、「だれも否定することができない」のだと言う。

こういう有節音声の抽出された共通性を音韻と名づけようと名づけまいと、有節音声が、そのなから音声として抽出された共通性を音の組み合わせとしてみとめることなしには、言語としての条件を完成できなかったことは確かだ。

ソシユールであれば、この問題について、言語は否定的過程によって音が認識されるのだと答えるだろう。つまり、物理的に特定の「音韻」がそれと認識されるのではなく、コンテクスト等によって「○○ではない」という判断の連続によって選択肢が絞られて、そこから「音韻」の同型性が認識されるのだ。だが、吉本がこの疑問から思考しているのは、単に手続が現象学的なそれであるからではない。なぜなら、吉本が「音韻」と名付けようとしているものには、別の名称も与えられるからだ。

こういう音声反応（原始人の手拍子—論者註）が有節化されたところで、自己表出の方向に抽出された共通性をかんがえれば音韻となるだろうが、このばあい有節音声が見られる対象への指示性の方向に抽出された共通性をかんがえれば言語の韻律の概念をみちびけるような気がする。だから言語の音韻はそのなかに自己表出以前の自己表出をはらんでいるように、言語の韻律は、指示表出以前の指示表出

をはらんでいる。

言語のもつ音声的な規定には、「音韻」の他に、リズムといったような「韻律」のそれも含まれる。例えば、自己表出によって対象との直接関係を離れた「うみ」は、「う」と「み」を組み合わせた「音韻」を有しているが、同時に「う」「み」のどちらにアクセントがあるかによって「意味」が異なってくる。つまり、現実から離れ、「意味」を有した言語は、その時点で独自の「音韻」と「韻律」を有しているのだ。

その意味で、吉本はソシユールとは全く異なることを考えている。シニフィアン／シニフィエという分離は、音声（記号）と意味を分ける代わりに、意味を示す音声を一元化してしまう。しかし、吉本が拘っているのは、その意味生成をなすのは、シニフィアンの方であり、シニフィアンの二面性が、意味の在り方を決めているというものなのだ。

時枝誠記が『国語学原論』で詞・辞として分類し、三浦つとむが『日本語とはどういう言語か』で、客体的表現と主体的表現として大別したものは、これにかかわっている。

これらの言語学者の考察を吉本は、己の「自己表出」「指示表出」に対応させる。言語の発生は「自己表出」であるが、それを意味づける過程には「指示表出」があり、それぞれが「音韻」「韻律」として言語に内在していると言っているのである。

吉本の議論は目的に対して用意周到である。言語の発生過程を論じているように見えながらも、その目的が「美」であることに常に意識的だ。言語が現実を生じる際に、そのフレームには、本質的に「音韻」と「韻律」があるという発想は、日本の詩歌（特に伝統的な音数律のそれ）が、リズム（音数律）の力で、本来対象とは切断されているはずの言語の指示表出の力を高めていることと深く関係している。

原始人がはじめて現実の対象を有節音声としてえらびとったとき、発したその音声は意識に反作用をおよぼした。それは一連の意識の波紋をえがいたにちがいない。こういった一連の意識の波紋は、また一連の音声波紋として表出せられたかもしれない。

言語は言語となった時点で対象との直接の関係性から切断されている。その切断のきっかけは「自己表出」でありそれは、有節音声そのものとして表出される。だが、それが高まる過程には、音声そのものが固定化してゆく側面と、リズムそのものが固定化してゆく側面がある。だが、有音節が一音節では、リズムを生じさせるのは難しい。ある程度数の、有音節が連なることよって、リズムというフレームが出来上がり、そのフレームの繰り返しの中で音節もより一層固定化してゆくのである。

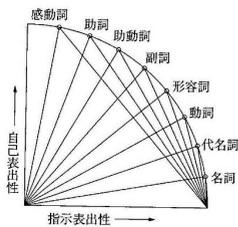
日本語を意味論的に分節してゆく際の最小単位として「品詞」

がそれに相当することには吉本も異論がないようだ。むしろ、時枝誠記は「辞」として助詞、助動詞、感動詞を挙げ、三浦つとむが「主体的表現」としてこれに応答詞、接続詞を加えていることに吉本は注目し、フレーム（韻律）の中で音韻が「自己表出」によって高められている例として『万葉集』の和歌を五五首、任意に抽出している。

抽出された和歌は「助詞」と「助動詞」という項目で整理され、「ゆ」「なり」「らむ」「が」「へ」などの「助詞」「助動詞」が、現代よりも多くの「自己表出」を含んでいたと説明する。

続いて「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」という項目を立て、歌中の表現主体の「指示表出」の意識を抽出する。「副詞」という比較的「指示表出」性が少ない項目にむかって説明されているのは、これらの「指示表出」が結局のところその言葉の選択によって「自己表出性」を高めているからだ。それも、その選択は、既に前提として五音や七音という音数律によって規定されているからこそ、選択の意識が高まっているのだ。

自己表出と指示表出の割合を品詞別に分類した「言語美」で使用される図表の中で最も有名なこの表（第4図）は、分かりやすい反面、誤解の多いものでもある。吉本は、品詞を「自己表出」と「指示表出」の面から分けたいのではなく、全ての品詞に内在する両側面が傾向



第 4 図

として、どちらかにベクトルが偏る様相を示しているだけなのだ。だが、この表が示唆することは「言語美」の理解において非常に重要である。

まずは、「自己表出」と「指示表出」に「性」という語を付けることにより、これが傾向であることをはっきりとしてしている点。もうひとつは、「名詞」のようにどんなに「指示表出性」が強い品詞だとしても、「自己表出性」の盛り上がりが一番下の直線状態（反射）から、言語たらしめていることが明確に示されている点を理解しておく必要があるだろう。ちなみに、この角度で示すと零度にあたる直線（反射）の向こう側には、対象となる「現実」が存在するが、それをそのまま上方向に平行に持ち上げていった場合、それぞれの品詞との交差点から右に伸びた位置には、言語がもたらすイメージが存在する。これを後に吉本は「像」と呼ぶが、自己表出が高まるほど、「現実」と「像」の差は大きくなることも後の議論では重要な点になる。日本語では、名詞などに比して助詞や助動詞は音節的に短い傾向がある。「自己表出」傾向が強いこれらの品詞は同時に「指示表出性」が弱い。このことは、吉本が和歌の批評の際に、ある助詞や助動詞の「選択」から始めることと無関係ではない。「Aに」と「Aへ」は、ともに方向を示す助詞ではあるが、その違いはAという場所に対する主体の位置と意識（選択）が反映されているというわけだ。だが、どちらを使用すべきかという「選択」の根拠には、字数を制限するフレームの存在がある。これが、吉本（北カッシラア）の言う単語よりも文が先に

存在したという言説の根拠だ。

ただ、吉本も述べているように、その説の真偽はあまり問題ではない。むしろ、吉本自身も述べていないこととして注目しておきたいのは、助詞や助動詞が、文脈というフレームの中において表現主体にとつての自由度が狭いということだ。例えば、「人間性」や「かわいい」という単語は、表現主体の意識次第によっては、正反対の意味で使用することが可能だ。だから、評論や説明文のようなジャンルの文章でさえ、これらの使用のベクトルを制限出来ない。だが、「けり」や「へ」を表現主体が自由な使い方方で表現することは難しい。

「自己表出性」の強い品詞は、その選択から「自己表出」の強さや内実を窺うことは出来ても、「指示表出」に伴う具体的な「像」を喚起させることは難しい。一方、「指示表出」が強い品詞は、韻律におけるその選択の仕方、結果「自己表出性」の高さを示す。だが、あくまでも、これらは「美」を目的とした「言語」における傾向だ。

四

続いて吉本は、言語の「意味」に関しての考察に移る。この章の意味をとるのは容易いのだが、実は、この章の意義は続く「価値」の章とセットで考えることではっきりと理解される。

吉本は、「意味」を「言語」のそれに限定した上で、「言語の意味がわからない」という場合を三つに分類し考察してゆく。

ひとつは、「指示表出」としては死滅している場合、二つ目は、「指示表出」が「擬事実」へ変容する場合。最後に、「自己表出」がひろがり「指示表出」を包み込んでしまう場合だ。いずれも、「分らない」という現象には「指示表出」が絡んでいる。

古典の中では「意味」が分からない言葉に出くわすことが多い。それは、その言葉の「指示表出」が辿れないからだ。前衛詩などでは、一つ一つの単語の意味、あるいは全体としての言葉は了解出来てもそこから立ち上がる「事実」が現実のそれとしては理解出来ないことがある。こうした状況を「擬事実」と呼んでいるのだ。

最後の例は、二番目の例と似ている面もあり、しばしば前衛詩などにも現れる。先程と同様に「擬事実」ではあるが、それが最早「事実」と理解出来る範疇を大幅に外れてしまうために、「自己表出」の言葉としか受け取れない様相を示している。

吉本の考えでは、「指示表出」の対象を理解できるかどうか、「意味」の成立を決める。この場合の理解とは「現実」という参照項によって決まるわけだが、この説明が優れているのは、「意味」が分からない場合にこそ、文学的な魅力が生じる可能性が高いことを説明出来る点だ。

古典の中にある現代では使われない言葉に何となく魅力を感じるの強い「自己表出性」が現在にまで残っているからだ。現代でも通じる言葉が「現実」参照を持ち得ないものであっても、そこから立ち上がる「自己表出」が読者に通じるのであれ

ば、その言葉は、読者を魅了するかもしれないのである。

「意味」の追究において、時枝（実存主義的観点）や三浦（唯物的観点）やS・I・ハヤカワ（プラグマティズム的観点）、さらにはカッシラアなどの説を簡単に退けてしまう。何故ならば、それらは吉本の「目的」とは一致しないからだ。

吉本の現在の「目的」からすれば、「意味」が分かることと、その言葉が魅力的であるかどうかは、関係ないということが一番重要な帰結だ。吉本は、「言語の意味とは意識の自己表出からみられた言語の全体の関係だ」という結論を述べたあと、言語の「価値」の考察に移ってゆく。なぜならば、この「価値」こそが、先程の言語から生じる「魅力」であり、それが「言語」を「文学」たらしめる何かであるからだ。

吉本は、この「価値」という言葉をマルクスから学んでいる。マルクスは、「価値」の発生を「労働価値」に、「価値」の広がり「使用価値」と「交換価値」に分けて考えているが、ただし、これらが吉本の言語「価値」を説明する際に、「自己表出」と「指示表出」に対応していると考えるには注意が必要だ。

言語の「意味」が何であるかは「指示表出」と対象との結びつきで決まるが、その「価値」は自己表出で決まる。「言語」が交換の道具として使用されている場合、その価値は「指示表出」によって齎される「意味」によって決まるはずだが、文学的「価値」は「指示表出」の強さ（意味がわかること）によって決まらない。だが、吉本の理論ではこの「自己表出」は即「労働価値」あるいは即「自己表出」となるようには定義づけ

られていない。吉本の考え方は、基本二元論の枠組の中において一元論的な位置から見ると「指示表出」と「自己表出」のバランスで考えることは、「価値」の広がりの説明することに向いているが、そもそも吉本はその原理においては一元論的な説明を周到に退けているからだ。

水に対する「使用価値」はその水を「使用」する人間の欲望によって決まるだろうが、その水の「交換価値」はそれが存在する社会（歴史）によって決まる。金やダイヤモンドのように、「使用価値」よりも「交換価値」が強いものであっても、その「交換価値」は歴史的、社会的な背景がなければ、その「価値」は醸造されない。しかし、「使用価値」「交換価値」はいずれにしても、その発生原理を説明しきれない。

そう考えれば、言語の「美」の追究という課題においても、やはり「労働価値」についての言及はこれ以上必要ないということが分かる。問題は、使用価値や交換価値のようなものが、いかに「価値」を構築してゆくかにあるからだ。

吉本は、「価値」の問題を考える際に、ギローの『文体論』の議論を取り上げる。ギローは言語から生まれる「価値」を「概念的」「表現的」「印象的」という三つに分けて考える。言語がコミュニケーションにおいていかに文学的、「印象的」になつてゆくかをめぐるギローの議論は、一見説得力があるようで、「自己表出」という概念がないギローは、結局のところ、指示表出性Ⅱ交通の言語で説明できないものに「価値」という名を与えているのだと吉本は言う。

ここで初めてソシュールの『言語学原論』が論の組上にあがる。

ある価値が存在するためには、以上二つの要因が必要である。かくて五円貨が値するところのものを決定するには、1、それは、何か別の物、例へば米の一定量と交換することができると、2、それは、同じ体系に属する一つの相似た価値、例えば一円貨と、或は他の体系に属する貨幣（ドル、等）と比較することができると、を知らねばならぬ。同様にして、語もまた何か相似ざる物、即ち観念と交換されることができ、その上、何か同じ性質の物、即ち他の語と比較されることが出来る。

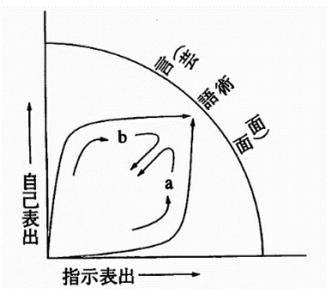
現在の我々には、これが言語の二つの条件のうちのひとつ「差異の体系」について述べていることはすぐに理解出来る。だが、「交換可能性」については、我々のソシュールの印象と異なる。しかし、ここでソシュールの述べていることは、「比較（等価／差異）」「交換」され得ることには何の根拠もないということだ。そう考えれば、これは「記号の恣意性」について述べていることが理解されるはずだ。だが、それ以上に重要なことは、言語の条件とそこから生じる「価値」の関係が全く述べられてはいないことだ。ソシュールにとって「価値」は二次的な問題であり、本来は「価値」とはそれを示す記号とは何の関係もないものなのだ。

吉本はギローとソシユールの両者の共通点として、言語の「指示表出」以外の面、つまりは「自己表出」の面を全く考慮していないことをあげている。ソシユールは、「等価値」と「交換価値」が言語を成立させ、そこから「価値」も生まれるのだと考えているのだから、吉本は、その両者の価値をどちらも「指示表出」と見なして退けているわけだ。

〈海〉という言葉を、意識の自己表出によってうちあげられた頂きで、海の象徴的な像をしめすものとしてみるとき、価値として〈海〉という言葉のみている。逆に〈海〉という言葉を、他にたいする訴え、対象の指示として、いかえれば意識の指示表出のはてに、海の像をしめすものとしてみるとき、〈海〉という言葉の意味としてみている。

そして、吉本は言語の「価値」を「意識の自己表出からみられた言語の全体の関係」と定義した上で、その考え方を次のように図示している。

この図で注目すべき点は、aとbの経路がどちらも、自己の方向に戻って行く点である。何度も述べているが、指示表出と自己表出が異なるだけではなく、指示しているものを対象化



することと、自己の表出を対象化するのも、それは言語として外在化されたものが、再び自己と出会う時だからだ。

〈海〉を「うみ」と指示できるという「意識」は、既にそれを「意識」している「主体」が居るわけで、一方で、〈海〉をみて「う」と自己表出した、その言語が自分に聞こえた時、それは発した言語を対象化している自分の存在を「意識」している。いずれにせよ、それが「反射」から「言語」になる重要な分岐点なのだ。それを、吉本は、自己へ帰って来る矢印でしめている。

マルクスならば、わたしがここで径路として図示した言語の価値を、あたかも商品の価値についてのべたとおなじように、指示表出価値と自己表出価値との二重性をあらわすと云うところかもしれない。

マルクスならば、言語起源(労働価値)から分離した「使用価値」と「交換価値」の双方で歴史を考えるだろうが、それはさき考えたように吉本の目的とは合わない。「使用価値」「交換価値」は社会的交通の中で生じる面が強いからだ。

言語の「美」は、その「価値」を論じることから始めるべきであり、その「価値」は、「自己表出」の面から言語を見てゆくことでは、なし得ないのではないか、というのが、吉本の「価値」の重要な帰結なのである。

五

次に吉本は、文字の成立の意義について議論し始める。通常、音声言語が記述されるために文字化されるという思考を踏むわけだが、吉本はそうした考え方を、「自己表出」か「交通（指示表出）」かという不毛な論争の延長上にしかないと退ける。吉本にとつて、文字の出現とは、高度に共通に抽象化され「音韻」の意識にまで辿り着いた証左であり、それは音の代替ではなく、その意味そのものの定着なのである。

文字の成立によつてほんとうの意味で、表出は意識の表出と表現とに分離する。あるいは表出過程が、表出と表現との二重の過程をもつようになったといつてもよい。言語は意識の表出であるが、言語表現が意識に還元できない要素は、文字によつてはじめてほんとうの意味でうまれたのだ。

「言語表現が意識に還元できない要素」とは、つまりは「自己表出」や「指示表出」なのだが、なぜ「還元出来ない」のか、なぜ「二重の表出」なのか。それは、先程まで議論してきた対象の客観化という問題と密接に関係している。自己表出は文字として対象化されることによつて、自己表出されたものを対象化する「私」と、「私」が対象化している文字は分離される。これは、指示対象が言語化（音声化）された時に、それを意識

する「私」と「私」に意識されている対象に分離することと同じだ。ただ、語り言葉は「指示表出」に、文字は「自己表出」に繋がることに特徴がある。

ただし、これらは「特徴」として見出される傾向であつて、自己表出語／指示表出語という言語上の区別も、自己表出文字／指示表出文字という文字上の区別も、あくまでも傾向の問題であり、どちらかに完全に振り切ることはない。

では、何故「自己表出」は文字と結びつきやすいのか。吉本は、これを、「理性」を「りせい」と表現することの違和感などによつて説明している。確かに、文字の種類（ひらがな、カタカナ、漢字）や種類内の選択（悲、哀）などは、自己表出性と密接に関係している。

たとえば〈石〉という名詞は、石の概念を意味するとともに、表現の内部では任意の石の像を表現し、また喚びおこす。この石の像は、甲という人間にとつては、かつて海岸で遊んだときの浜辺にあつた石の像であるかもしれないし、乙という人物にとつては、いまさき蹴つまずいてころんだ石の像であるかもしれない。

ただ、吉本は「自己表出」と文字の関係の具体例の中で、何度も「像」という言葉を使用していることは注意が必要だ。言語には意味や音の他に像を喚起すると言ふのだ。

なぜ、このタイミングで像について強く拘つたのか。それは、

対象化という説明の仕方では、「表現」と「表出」の違いを理解しにくいことと関係しているのかもしれない。

「対象」——「表現」——（表出）——「主体」

「対象」と「表現」と「主体」が率直に結びついている様相が「反射」なのだとしたら、「表現」が言語になるためには、表出が必須の条件となる。このことを、吉本は「表出と表現の二重の過程」と呼んでいるのだ。

しかし、音声が意識の自己表出として発せられるようになると、指示は現実の世界にたいするたんなる反射ではなく、対象とするものに対する指示にかわった。いわば自己表出の意識は起重機のように有節音声を吊りあげた。

この「吊りあげた」という表現に注目したい。これまでの吉本の説明した図では、自己表出が「吊りあげた」結果として、直接的な指示対象ではない像に辿り着く様子がよく示されている。自己表出が像を生み出すのである。

しかしそれとは逆に言語の像をつくる力は、指示表出のつよい言語ほどたしかだといえる。この意味で言語の像は、言語の指示表出と対応している。いいかえればつよい自己表出を起動力とするよわい指示表出か、あるいは逆によわ

い自己表出を起動力にしたつよい指示表出に起因するに
かだといふべきだろうか。

そして像のもつ最大の特徴を吉本は、サルトルからヒントを得た「眼前にあるものの像を思い浮かべることは難しい」という非常に分かりやすい例を挙げて説明している。何故か、それは像は対象の「像」ではなく、主体の「自己表出」が生み出した、対象の「像」とは異なったものであるからだ。

確かに、〈海〉をみた人間の〈う〉という反射が、〈うみ〉という言葉になったとき、それを発する人間は、眼前に海がない洞窟の中でも、〈うみ〉と言えらるだろうし、眼前に海がないからこそ、頭の中で像を喚起することが出来る。ただし、この像は〈うみ〉と発する人間それぞれによって異なるものである。

だが、ここで吉本は、「像」を生み出す条件に関して、これまでの議論に合わせて重要な点を再確認しようとする。

もしも言語が像を喚び起したり、像を表象したりできるものとするれば、意識の指示表出と自己表出とのふしぎな縫目に、その根拠をもとめるほかはない。

ここで、ふたたび言語進化のところでもかながえたものを、あたらしい眼でたどってみなければならぬ。

確かに、言語の起源には自己表出による「吊り上げ」がある。だが、像は、その「吊り上げ」の結果であり、それは「価

「値」であっても「意味」とは異なるものである。先に引用した図4で考えたとき、「像」とはどこに現れるのだろうか。

半円上の点。問題は、これらの点が、「価値」「意味」「像」の中の何を意味するのかということだ。

指示表出の直線（右に向かう0度線）の先には、言語を喚起した何かがある。それと非常に酷似しているように思われる名詞ですら、もたらされる像は、その何かとは異なる。吉本は「意識の指示表出と自己表出とのふしぎな縫目」にその根拠をもとめるほかはない」と言う。ということは、指示表出が自己表出によって吊り上げられた位置である点の位置は、少なくとも像の「根拠」であり、像そのものではない。

左記の図のaは、「意味」の生じるベクトル、bは「価値」の生じるベクトルである。ということは、aとbの外側のベクトルが合わさった「縫目」には像の「根拠」があり、それが自己表出の面からみられた場合が「価値」、指示表出の面からみられた場合が「意味」となる。ここでいう「見られた」というのは吉本の語彙ではない。吉本はこの点について、以下のような言い方をする。

このことは、人間の意識を外にあらわしたものととしての言語の表出が、じぶんの意識に反作用をおよぼすようにもどってくる過程と、外にあらわされた意識が、対象として文字に固定されて、それが〈実在〉であるかのようにじぶんの意識の外に〈作品〉として生成され、生成されたも

のがじぶんの意識に反作用をおよぼすようにもどってくる過程の二重性が、無意識のうちに文学的表現（芸術としての言語表出）として前提されているという意味になる。

文学には、口承文芸のような無文字文学も存在するが、それとても、無言語文学ではない。外的な何かの刺激によって、言語として固定化されたものは、元の何かとは異なったもの（文字あるいは言語）として再び主体にまなざされることになる。

ある現実の〈海〉によって〈うみ〉という言葉を発し、その〈うみ〉という言葉が主体によって再び捕らえられた瞬間既にさきの現実のままの〈海〉ではあり得ないということである。

吉本は、文学の「価値」を考えるためには、現実とは異なる「表現」が「固有の意識に還元される面」と、「表現そのもの」しか還元されない面、つまり「表現」としてしか定着しえなかった「自己表出」という部分を考慮すべきだという。この「二重性」を「構造」と呼んでいるわけだ。

では、「構造」を意識しながら文学を読む実践、すなわち「価値」を読もうとする実践はどのようなべきなのか。ここまですぐ道具立てを揃えて来た吉本の答えはシンプルである。それは文学の表現を語り手の「表出」として読むというものである。

彼はまだ年若い夫であった。(庄野潤三「静物」)

吉本はこの例文を「彼」(代名詞)、「は」(助詞)、「年若い」(形容詞)「夫」(名詞)……などと分解して、それぞれの品詞「意味」で把握することを「指示表出」の面からみることと説明している。それに対して、「自己表出」の面から見る場合、「彼」という代名詞の選択の表現主体についての意識、「若い」ではなく「年若い」という選択、「男」「亭主」ではなく「夫」という選択が表現主体にとってどんな意味をもつのかを考えながら読むことになる。

六

先の例で「自己表出」＝「価値」に従って読むためには、表現主体の「選択」として、言語(文)を考えると吉本の説をあげたのだが、実は「価値」を見出す際に、何に注目すべきなのかという点に関して、吉本は四つの重要な着眼点を提示している。それは、「選択」「喩」「転換」そして「韻律」である。この四つの関係を図示してみると、恐らく次のようになる。



表現主体にとって言語行為は選択の連続である。「は」というか「が」というか、「青い」というか「碧い」あるいは「蒼い」か……。選択が横並びの中からの選択であるとすれば、選ばれた言葉は次の言葉に繋がるか、切断するしかない。それは縦への繋がりである。喩とは接続すること、転換とは切断することだ。

選択、喩(接続)、転換(切断)は、主体に委ねられてはいるが、主体はその表現行為において、音韻と韻律の制限を受けずにはいられない。例えば、日本語において、母音の選択は五種類の音韻の中からのそれとなり、「あ」という音韻の中に包摂されてしまう差異は選択の結果としては無化されてしまう。また、その表現の積み重なりは、それ自体が次の表現への枠組みとして機能するようになる(文体のリズム)。その最たる例が、音数律だと考えれば分かりやすいだろう。

この四要素で興味深いのは、やはり韻律の属性に関してである。音韻は自己表出に属するものであるが、リズムは指示表出に属するものであるというのが、吉本の定義だが、同時に、言語の価値は、自己表出性と深く関わっている。

しかし、このねじれは理論的にはあまり本質的なそれとは言えない。何故ならば、今考えているのは言語にとっての「美」であるからだ。言語表現として美が問題になる場合、そこには既にある程度のフレームを有していても不思議ではない。小説、短歌、詩歌、どんなジャンルであっても、歴史的にある程度のフレームが形成されている。文章を構成する単語の発生時には

音韻がその選択に際しフレームの機能をなすが、それが集まって文章となつてゆく過程では、もう少し大きなフレームを必要とする。そのフレームとしての役割を吉本は「音律」であると考えているのだ。

日本語における五・七・五や五・七・五・七・七などという字数は、有効なフレームとして機能する。もちろん、これらのフレームは表現主体からすれば意識的選択の結果である。また、その選択肢は、誰にとつても同じ形式として外部に存在している。そういった意味でも、音律は自己表出的ではないと言える。

では、自己表出の強度を基本とする言語の美において、何故韻律という指示表出による作用を重視するのか。それは、韻律が結果的に自己表出の作用を強める働きをするからだ。吉本が性への一限還元主義としてフロイトを退けていたことはさきに述べた通りだが、実は無意識におけるエスと超自我の関係に非常に近い。エスは実現に対するエネルギーでしかないのです、そこに有効の形を与えることも超自我の重要な機能だ。超自我とは単なる禁止や抑圧のみとして作用しているわけではないのだ。

吉本は、時代（外部）がフレームをつくり、それが自己表出を可能にしているというフォーマットで、表現史を再構築しようとしている。そこに、本論で論じてきた理論と、以後に続く実践の紐帯がある。その実践の内実は、また別項にて検討してみたい。

（東京学芸大学・教授）